

大阪府市町村ボランティア連絡会 役員名簿

役職	氏名	市町村
会長	井上 健太郎	大阪狭山
副会長	北嶋 玉枝	吹田
	山田 雪枝	大東
	谷水 みさ子	羽曳野
幹事	中村 牧子	高石
	小森 愛子	豊能
	北川 シズ子	四条畷
	近藤 雅美	河南
会計	川口 朋子	岸和田
	茨木 瑛雄	熊取
監査	原田 貞雄	摂津
	谷口 豊基	寝屋川



他分野活動団体との交流会

を新たに
い、今ボラ
ンティア活
動に求めら
れているもの
を考へ、様々
な活動を実施
しました。

「Vサイン」のコーナーでは、これらの取り組みをタイムリーに発信していきます。

平成20年度は、ボランティアを取り巻く現状と課題を検討する部会活動、他分野の活動団体との交流会

大阪府市町村ボランティア連絡会総会が開催され、新しい役員が決まりました。

大阪府市町村ボランティア連絡会

5月8日、大阪社会福祉指導センターで開かれた平成21年度総会において、昨年度の取り組みや今年度の事業計画等が報告・承認されました。新しい役員体制のもと、リーダー研修会、全体研修会、ブロック交流会、広報部会等の部会活動を通じ、さらなるボランティア活動の推進に努めていきます。



新会長の井上健太郎氏(中央)



府内各市町村から106名が参加

市民活動の今

Close up! 住民参加型在宅福祉サービス

住民参加型在宅福祉サービスとは、利用者と提供者が会員制の仕組みをとって非営利・有償で提供されるサービスで、制度の谷間にある地域住民のニーズに柔軟に対応する住民相互の助け合いを基盤とした市民活動です。

このコーナーでは、市民活動が多様化する中で、従来から先駆的な取り組みを行ってきた「住民参加型在宅福祉サービス」を取材することで、これからの市民活動のあり方を考えてみたいと思います。

誰でも主役になれる居場所づくり

阪南市 NPO法人 ぐらしのたすけあい えぶろんの会

「えぶろんの会」は高齢社会が進むなか住民参加型在宅福祉サービス有償ボランティア団体として、地域で助け合える組織をつくろうと1995年に設立されました。2000年介護保険制度のスタートと共に介護保険事業、2003年障がい福祉サービス事業、今年4月からは地域支援事業の介護予防教室などの活



動を行っています。

さらに昨年は、大阪府社会起業家ファンドの支援を受け「茶ノ間ギャラリー」の開設をスタート。「市民の方が趣味で制作している美術品、手芸品の展示販売や個展開催、文化教室などに使ってもらうギャラリーです。団塊の世代・福祉制度等などを利用して健康な方々の参加できる「居場所」をと考え開設しました」と理事長の岩井俊子さん。事業者としての活動だけでなく、本来の住民参加型の部分を打ち出したかったといいます。瞬く間に地域で知られる存在となり、個展開催スペースは申し込みでいっぱい、コンサートなどのイベントも大盛況。今年地元企業の製品を紹介する行事を計画中です。「いずれは世代交替となりますから、若者にアピールするような企画も立てたいですね。地域支援を目的として始まった会がこのような形で発展できたのは、ボランティアさんおよび住民の皆さんのおかげ。これからも新しい発想をもらいながら、生き生きしたまちづくりに貢献していきます」。

平成21年度河南ブロック交流会、開催 ボランティア活動の課題を話し合う



11市町村より、50名が参加しました

7月1日、東大阪市のクリエーションコア東大阪で河南ブロック交流会が開催されました。

交流会では「他分野・他団体との関係について」「活動資金の確保について」「次世代を担う人に対する働きかけについて」「無償活動・有償活動について」のテーマについて意見交換をしました。

その中で「他団体との関係」では、活動歴の長いボランティアグループと新しく立ち上がったグループの連携について話し合われ、双方の活動をつなげ

福祉の就職総合フェア2009 in OSAKA、ボランティア相談コーナーを担当しました



7月4日、インテックス大阪で福祉の就職総合フェアが開催されました。大阪府市町村ボランティア連絡会は、ボランティア活動の啓発を目的としてボランティア相談コーナーを担当しました。当日は13件の相談が寄せられました。中でも、「現場でボランティアをしながら資

格を取得したい」など就職に向けてのステップとして、ボランティアに興味を持っている来場者が多く来られたのが特徴的でした。

また、求人出展ブースの施設職員から「入所者へのお化粧やおしゃれのアドバイスをしているボランティアはなにか」と相談を受け、グループを紹介するなど、ボランティア連絡会として、多くの来場者に情報を提供することができました。

今後多様な機会で、ボランティアの啓発とボランティア連絡会の活動を積極的にPRしていきたいと思えます。

「活動資金の確保について」「次世代を担う人に対する働きかけについて」「無償活動・有償活動について」のテーマについて意見交換をしました。

その後、町工場の独自技術を生かした製品の展示場を見学しました。各市の参加者と一緒に見学し、ブロック内の交流が一層進みました。



ものづくり企業の展示を見学

市民活動の今

Close up! 住民参加型在宅福祉サービス No.2

住民参加型在宅福祉サービスとは、利用者と提供者が会員制の仕組みをとって非営利・有償で提供されるサービスで、制度の谷間にある地域住民のニーズに柔軟に対応する住民相互の助け合いを基盤とした市民活動です。

このコーナーでは、市民活動が多様化する中で、従来から先駆的な取り組みを行ってきた「住民参加型在宅福祉サービス」を取材することで、これからの市民活動のあり方を考えてみたいと思います。

利用者主体の介護予防住宅が実現 吹田市 NPO法人 友-友

配食サービスからスタートし、地域の高齢者への支援活動を行っているNPO法人「友-友」。調理が困難な人たちに家庭の味を楽しんでもらおうと、毎日、約100食前後を届けてきました。「現在は行政からの委託事業となり、利用者さんの安否確認も兼ねているので、民生委員さんやケアマネー



▲毎日配るお弁当はボランティアの手作り



▲代表理事の小林房子さん

カードを利用して、仲間と楽しみながら脳のトレーニング



ジャーさんと情報交換に努めています。助け合いの気持ちがシステムとして根付き、地域の福祉資源が連携できるような世の中が理想」と代表理事の小林さん。20年超の間に活動は広がり、街かどデイハウスやデイサービス、地域通貨などにも力を入れています。

今年度末には、国の高齢者居住安定化モデル事業に採択された、24時間見守り付きの住宅をオープンする予定。この住まいは、健康状態が悪くなってから入るのではなく、介護予防を目的とするもの。住み慣れた地域で一人になっても仲間と集えるリビングを設置し、住人の話し合いでルールを決める「住まい」です。一人暮らしの不安や孤独が認知症を進ませる原因となっていることから、24時間の見守りを実現しようとアイデアが生まれました。生活のサポートは登録スタッフがいき、謝礼には地域通貨*を利用と、友-友の活動の集大成となりそうです。住み慣れたまちで、誰もが安心して暮らせる理想の住まい。誕生が待ちのぞまれます。

*地域通貨とは、ある特定の地域で、ものやサービスのやり取りをするときに使われる交換手段。友-友ではボランティアへのお礼などに利用。

他団体との連携が大切 泉州発！防火・防災への取り組み

9月29日、高石市で泉州ブロック交流会を開催し、泉州ブロックの各ボランティア連絡会での防火・防災の取り組みについて情報交換を行いました。

情報交換会では「ボランティア連絡会と社協ボランティアセンターが協働し、災害ボランティア検討部会を設けている」「福祉教育として子どもたちと非常食の炊出し訓練をした」「ボランティア連絡会と地区福祉委員会が共催し、防災マップを作成した」「防火の視点から、住宅用火災警報器設置に関するアンケートをした」「ボランティアグループの緊急連絡網づくりを行う予定など各連絡会の取り組みにつ



▲各ボランティア連絡会から28人が参加しました



▲岸和田市災害ボランティア検討部会の研修では搬送を体験



午後は石油化学工場の防災システムを見学しました

いて報告がありました。また今夏、水害を受けた兵庫県佐用町から消臭用の炭が必要だという情報が届き、岸和田市の自然保護ボランティアグループが竹炭を焼き、田尻町社協が調整し被災地に届けました。届けた竹炭は、老人福祉センターや作業所、保育所などで床下の悪臭取りに活用されました。今回の交流会では様々な課題がある中で、とくに他団体と連携することの必要性が再認識されました。まずは、ボランティア、地区福祉委員会、社協、行政などがそれぞれの役割を理解していくところから始めていきたいと思います。

市民活動の今

Close up! 住民参加型在宅福祉サービス

住民参加型在宅福祉サービスとは、利用者と提供者が会員制の仕組みをとって非営利・有償で提供されるサービスで、制度の谷間にある地域住民のニーズに柔軟に対応する住民相互の助け合いを基盤とした市民活動です。

このコーナーでは、市民活動が多様化する中で、従来から先駆的な取り組みを行ってきた「住民参加型在宅福祉サービス」取材することで、これからの市民活動のあり方を考えてみたいと思います。

子育て中の若い母親に寄り添う

高石市 NPO法人 泉ひまわりの会

泉ひまわりの会は在宅介護支援や配食サービスなどを行うNPOです。活動を進めるなかで、子育て中の若い母親や精神障がいを持つ人たちへのメンタルサポートが制度として十分で



▲配食サービスは利用者の制限を設けず、一般の希望者にも対応

ないことを知り、自分たちでやろうと支援をスタート。悩み事の相談相手や家事の手伝いなどを中心に取り組んでいます。「育児不安でパニック状態のお母さんから連絡が入ったら、必ず誰



▲泉ひまわりの会理事長の喜谷和子さん(後列、左)と同会のメンバー

かが駆け付けます。私たちが育児を手伝うことで子どもと離れる時間をつくり、話を聞いてあげるだけで相手は落ち着くんです」と喜谷さん。同会には保育士や看護師、栄養士、教員免許など資格取得者が多く、さまざまな専門性を地域のために活用したいというメンバーが集まっています。一人ではできないことでも、複数のメンバーが少しずつ時間をやりくりすることで、支援を求めている相手も住み慣れた街で生活を続けられる。それが住民参加型活動のよさです。

将来は同会のメンバーが集まり、「私たち自身が楽しめるデイサービス」をつくりたいそう。「趣味や生涯学習などそれまでの各自の生活は守りつつ、困ったことは助け合える憩いの場です。『既存にはない、こんなサービスがほしい』と思ったら、自分たちでどんどんつくっていきばいいと考えています」。

ボランティア活動の多様化を考える 社会起業家をテーマに、リーダー研修会を開催



▲社会起業家もお互い様の心が大事

11月12日、大阪府市町村ボランティア連絡会リーダー研修会が開催されました。今回は地域課題への新たな取り組みを考えるとして、NPO法人おさか元気ネットワーク理事長の三和清明氏、理事の高見一夫氏に社会起業家の取り組みについて講演いただきました。

社会起業家が必要とされる背景として、近年地域では複雑な課題が増えていることがあげられます。参加者からは、「初めて社会起業家について知った」「ボランティアグループもNPOも社会起業家も地域をよくしたいという思いは同じだと思う」との意見があり、地域課題の解決には多様な方法があると知りました。

広がる ボランティア活動

ボランティア活動の多様化を考えるきっかけとして、泉南市で行われている取り組みをご紹介します。NPO法人関西留学生支援センター「松風寮」では、現在ネパール、ドイツ、スペイン、ブータンの学生らに生活の場を提供しながら、地域の子どもたちを対象にした絵画教室や留学生が講師になる英会話教室を開催しています。「国際交流は一人だけできるものではありません。多くの人々に賛同してもらいたい」と寮長の道場さんは話します。子どもたちと留学生をつなぐ仕掛けによって、地域内交流を生んでいます。



▲道場正信さん(前列中央)と留学生のみなさん

市民活動の今

Close up! 住民参加型在宅福祉サービス

住民参加型在宅福祉サービスとは、利用者と提供者が会員制の仕組みをとって非営利・有償で提供されるサービスで、制度の谷間にある地域住民のニーズに柔軟に対応する住民相互の助け合いを基盤とした市民活動です。

このコーナーでは、市民活動が多様化する中で、従来から先駆的な取り組みを行ってきた「住民参加型在宅福祉サービス」取材することで、これからの市民活動のあり方を考えてみたいと思います。

高齢者も参加しやすいコミュニティを

泉佐野市 NPO法人 たんぼぼの会

介護予防教室やグループホームの運営、ヘルパー派遣などを行い、地域の高齢者がコミュニティに参加しやすくなるような環境づくりに尽力している「たんぼぼの会」。



▲たんぼぼの会のスタッフ

介護予防教室に多彩な趣味の教室を設けて、参加者が作成したスケジュール表に基づき、「来たい時に来たい人が来られる」居場所づくり。教室では地域の人々が習字や手芸、絵手紙の講師として活躍しています。また、グループホームの入居者の散歩を、地域の安全を見守る時間として位置づけ、毎日ハトロー



▲介護予防教室には、多くの高齢者が集まります。

ルに出発。こうした高齢者と地域の交流を支える取り組みに力を入れることで、町内とグループホームそれぞれの行事に住民と入居者が参加し合う関係が築かれてきました。

さらに在宅介護支援では有償活動を取り入れ、介護保険制度では対応できないニーズにも応えています。

「介護保険制度の場合はヘルパー派遣の時間に限度がありますが、有償活動であれば、話し相手になるなど、より利用者さんにゆとり寄り添うこともできます。住民参加型活動で利用者さんを主体としたケアを提供し、地域で暮らし続けるお手伝いをしたいですね」と話す片木谷真弓理事長は、近隣の高校の介護科で講師を担当。福祉職を志す生徒に、支援する相手や家族の心情を理解した上でサービスを提供することの重要性を伝えながら、次世代の育成に努めています。

ボランティア活動へ参加のきっかけづくり 第69回岸和田市ボランティアサロン

大阪府市町村ボランティア連絡会では、活動の担い手育成、他団体との連携、活動主体の多様化などボランティアを取り巻く課題について、各ブロックでの交流会や研修会等を通じて検討しています。

今回はボランティア活動への参加のきっかけ作りとして、4月17日に開催された岸和田市ボランティアサロンでの取り組みを紹介します。

このサロンは、ボランティア活動に関心のある人なら誰でも参加でき、企画・運営はボランティアサロン実行委員会が行う手作りのイベントです。実行委員は、岸和田市ボランティア連絡会のメンバーや個人登録ボランティア、福祉施設の職員が参加しています。まず、ボランティアグループや個人



▲岸和田市ボランティアサロン実行委員のみなさん
(写真は、当日参加者のみ。現在の実行委員数は、男性8人、女性8人の合計16人)



▶小学生のグループ「MINX & LIFT」がダンスを披露

ボランティアに興味がある人とボランティア経験者が定期的に集まれる場をつくり、各グループの活動内容を発信しながら、参加を呼びかけることが重要になってくるでしょう。

このようにそれぞれの地域で、ボランティアに興味がある人とボランティア経験者が定期的に集まれる場をつくり、各グループの活動内容を発信しながら、参加を呼びかけることが重要になってくるでしょう。

(大阪府市町村ボランティア連絡会 広報部会)

市民活動の今

Close up! 住民参加型在宅福祉サービス

住民参加型在宅福祉サービスとは、利用者と提供者が会員制の仕組みをとって非営利・有償で提供されるサービスで、制度の谷間にある地域住民のニーズに柔軟に対応する住民相互の助け合いを基盤とした市民活動です。

このコーナーでは、市民活動が多様化する中で、従来から先駆的な取り組みを行ってきた「住民参加型在宅福祉サービス」取材することで、これからの市民活動のあり方を考えてみたいと思います。

社会的ハンディのあるすべての人が対象

高槻市 社会福祉法人 高槻ライフケア協会

社会福祉法人「高槻ライフケア協会」は、誰もが自分らしく暮らせる地域社会づくりを目指して1991年に設立しました。「本人の意向に沿った支援」をモットーに、介護保



▲理事長の川浪スエ子さん(右端)と同会のメンバー

険など制度上のサービスだけでなく、入院中の院内ケア、老人ホームの外出援助、屋外の掃除など制度適用外のサービスも提供。時間単位で自由に使えるチケットを販売し、頼みやすいしくみもつくりました。常に「できない」でなく「どうすればできるか」を考え、病気なら医師、財産管理なら弁護士とあらゆる社会資



▲障がい者デイサービス「くらし創造の家朋(とも)」のイベントには多くのボランティアが集まります

源を活用し対応しています。隙間のないケアの実現は、ニーズや社会資源を共有できる他団体との信頼関係と「『助け合いの社会をつくろう』という想いに感動して活動を始めた」スタッフのボランティア精神に支えられています。

協会では、さらに障がいの種別や分野の壁をなくし、サービスの対象者を「社会的ハンディのある人」と拡大。障がいのある乳幼児などハンディが重複する人や、普段は元気だが心身の不調で外出できなくなった人も含まれ、「枠組みを外した」助け合いの実現に近づけています。

「ニーズがあり、担い手がいるなら、何でもやりたい」と理事長の川浪スエ子さん。今後はターミナルケアも視野に。「死を前にした人への寄り添いや、亡くなった後の家財処分などをどう解決するか。住み慣れた地域で、安らかに最期を迎えられる環境をつくっていききたいですね」。

「ボランティア活動は、楽しみと学びの場」 —摂南大学学生ボランティアサークル えんじょい—

大阪府市町村ボランティア連絡会では活動の担い手育成、他団体との連携、活動主体の多様化などボランティアを取り巻く課題について、各ブロックでの交流会や研修会等を通じて検討しています。

今回は、寝屋川市登録ボランティアグループ連絡会に加入している摂南大学の学生ボランティアサークル「えんじょい」の活動を紹介します。ともに若い担い手との関わり方について考えます。



▲代表の竹廣さん(前列右)とえんじょいのみなさん

えんじょいは2004年から活動を始め、登録会員が60人、そのうちの20人が中心となっているグループです。この活動は授業や実習の一環ではなく、メンバーの自発性を大切にしながら、発達障がいの子どもたちに勉強を教えたり、知的障がい児のための宿泊合宿の運営、聴覚障がい者のノートテイクなどを行っていきます。グループ名通り活動を楽しむことを第一に考え、無理をして活



▲月に1度、知的障がい児と外出。

の運営、聴覚障がい者のノートテイクなどを行っていきます。グループ名通り活動を楽しむことを第一に考え、無理をして活

動が楽しくなくなってしまうのではないように気をつけています。また、メンバーがボランティアを始めたきっかけは、大学の先生から紹介された、親がボランティア活動を日常的にしていたなど周りの人たちからの働きかけが影響しているようです。

ボランティア連絡会がより学生と関わるためのアイディアとして「活動をしたいという学生はたくさんいると思うので、既存のボランティアグループと学生グループとが関われる機会があれば、より参加しやすい」と代表の竹廣さん。

学生など若者がボランティア活動に関わってもらうために、親や先生、友だちなど身近な人たちからボランティア活動への参加を呼びかけるとともに、ホームページの活用など若者が見やすいツールを活用した情報発信が求められています。

(大阪府市町村ボランティア連絡会広報部会)

市民活動の今

Close up! 住民参加型在宅福祉サービス

住民参加型在宅福祉サービスとは、利用者と提供者が会員制の仕組みをとって非営利・有償で提供されるサービスで、制度の谷間にある地域住民のニーズに柔軟に対応する住民相互の助け合いを基盤とした市民活動です。

今回は、河内長野市のNPO法人たすけあいの活動取材し、住み慣れたまちで生活ニーズ解決のために支えあうネットワークづくりへの取り組みを紹介します。

助け合いの輪を生むコミュニティづくり

河内長野市 NPO法人たすけあい

'94年の設立以来、高齢者をはじめとした要支援者のサポートを行っている「たすけあい」。代表の中田壽子さん自身が家族の介護を経験し、「一人では難しいことでも、地域の支え



▲NPO法人「たすけあい」の皆さん

合いで乗り越えられるような組織が必要」と痛感したことが、立ち上げのきっかけだったといいます。市民組織ならではの心のサポートにこだわり、あえて介護

保険事業には参加せず、有償ボランティア団体として活動を継続。特に依頼が多いのは、医療機関などへの送迎サービスです。山間部を含む土地柄、高齢者にとっては交通の不便な場所が多く、男性ボランティアが一日10件ほどの送迎・介助に活躍します。



▲老若男女問わず楽しめる健康麻雀教室

「他にもいろいろなニーズはあると思いますが、支援を求める人というのは、なかなか自分から声をあげにくいもの。日頃の交流から自然と助け合いの輪が生まれるような仕組みをつくりたいと考えています」。そのひとつが、趣味を通じて新たな出会いを生む、生き生きサロンの開催です。布遊びや健康麻雀、パン



▲車いすの書道家の方と一緒にワークショップ

コンなどの講座で世代間交流を深めながら、互いの胸の内を共有し、地域のニーズを発掘していく。人づくりにつながるコミュニティづくりをめざし、今日も歩んでいます。

福祉マップづくりで他団体とつながる —茨木市ボランティア連絡会ふれあいサロン委員会—

大阪府市町村ボランティア連絡会では、活動の担い手育成、他団体との連携、活動主体の多様化などボランティアを取り巻く課題について、各ブロックでの交流会や研修会等を通じて検討しています。

今回は、いばらの友「地図つくろう隊」の活動を紹介し、1999年から始まった福祉マップづくりを通じて、ボランティア連絡会が他団体と協働しながら進めることの意義を考えたつもりです。



▶茨木市ボランティア連絡会会長の挨拶の様子（右からいばらの友「地図つくろう隊」のみなさん）

いばらの友「地図つくろう隊」は、茨木市ボランティア連絡会ふれあいサロン委員会と茨木市障害者生活支援センター「すてっぷ21」、個人ボランティアで構成されており、マップづくりも2010年で第4版を迎えました。この活動を始めたのは、視覚障がい者との交流がきっかけでした。また、活動にあたっては99年に作成された

門真市車椅子マップ「かどまる」を参考にし、ボランティア連絡会と情報交換をしながら進めたそうです。



最新の第4版では、障がい福祉サービス事業者リストを作成し、地域資源を整理して発信しました。

最初の活動は茨木市内の音声信号機を把握することでした。障がい者とボランティアで調査してみると、信号機の点字が違っている箇所もあることに気がきました。

第3版では音声信号機調査と合わせて、スーパーやコンビニエンスストア、公共施設をまわり、エレベーターの調査と多目的トイレの採寸もしました。「マップづくりのために、いっしょにお店を回ることで、障がいの有無に関わらず、同じ目線で活動することができ、ボランティア連絡会だけでは気付きにくい、当事者のニーズに耳を傾けることが出来ました。」と茨木市ボランティア連絡会の大藪会長は振り返ります。

これからも共に展開していく活動が期待されます。
(大阪府市町村ボランティア連絡会広報部会)

市民活動の今

Close up! 住民参加型在宅福祉サービス

住民参加型在宅福祉サービスとは、利用者と提供者が会員制の仕組みをとって非営利・有償で提供されるサービスで、制度の谷間にある地域住民のニーズに柔軟に対応する住民相互の助け合いを基盤とした市民活動です。

このコーナーでは、市民活動が多様化する中で、従来から先駆的な取り組みを行ってきた「住民参加型在宅福祉サービス」取材することで、これからの市民活動のあり方を考えてみたいと思います。

縦横無尽のつながりで地域の安心を築く

高槻市 NPO法人「高槻の高齢社会をよくする会」

“遠くの親戚より近くの他人”一介護の社会化を目指し「高槻の高齢社会をよくする会」は1992年に設立し、行政との協働事業や啓発活動をしていました。その2年後「よくする会」の中に会員互助組織「たすきの会」を立ち上げ、高齢になっても安心して暮らせるように助け合い活動を行ってきました。約10年に渡る活動を通して、助け合い



▲代表理事・山本洋子さん(右から2番目)、副代表理事・中越優さん(最右)と主力メンバー

のしくみを地域につくり、継続的にサービスを提供できる運営体制を整えるため法人格を取得し、介護保険事業を始め、制度適応外のニーズ(家事の援助や診察の順番待ちなど)を「たすきの会」でやることで、役割分担しています。

さらに「元気な高齢者の集える場所が少ない」と考え、デイサービスと同時に街かどデイハウス事業を行っています。週3回の介護予防教室やボランティアによる演芸等で、常時にぎわっています。その居心地の良さからか、数年通い続ける95歳の女性もいるとか。また、市内に9か所ある街かどデイハウスの連絡会に参加し、団体同士で情報交換や交流活動をしています。

さらに2007年には、副代表理事・中越優さんを中心として「認知症を理解し、地域で支える会」を結成。介護保険制度に欠けている“認知症ケア”や本人だけでなく“家族の支援”に重点を置いた取り組みを進めています。認知症ケアの研修会や事例検討会、認知症サポーター養成講座の開催ほか、NPOや家族の会、医療、介護施設とのネットワークづくりなどを進めています。認知症になっても安心して暮らせるまちづくりの第一歩を踏み出しています。



▲デイサービスと街かどデイハウスの利用者は同じ時間を共有。

外に開かれたボランティア連絡会を目指して 大阪府市町村ボランティア連絡会研修交流会

大阪府市町村ボランティア連絡会（府V連）では、活動の担い手育成、他団体との連携、活動主体の多様化などボランティアを取り巻く課題について、各ブロックでの交流会や研修会等を通じて検討しています。今回は、11月16日に開催された府V連研修交流会の様子を報告します。

今回の研修交流会は、今、ボランティア連絡会の役割を考えると「地域とよりつながって活動するために」をテーマに92人が参加しました。

はじめに、府V連のこれまでの取り組みと課題を振り返り、その後初代会長である矢形さん、元バリアフリー部長の栗原さん、現会長の井上さんとともにパネルディスカッションを行いました。

矢形さんは「V連の会員だけの交流ではなく、地域住民や他団体などV連としてもっと外部に活動をPRしていくことが求められている」と活動発信の重要性を話しました。

また、栗原さんからは「バリアフリー部の活動も楽しくやって



▲休憩時間に4連絡会がミニ体験コーナーを設置

アフリー部会の活動も楽しくやっていたので、活動を苦勞だったとは思っていない。ボランティア活動を継続するには、自分自身が楽しむことが必要」とエールを送りました。

参加者から「これからのボランティア活動はニーズの変化と世の中の変化にいかに対応していくのか求められている」という感想がありました。

来年度は府V連設立15周年を迎え、連絡会の意義をより発信することが求められています。地域での課題を発見し、行動できる連絡会を目指したいと思いを。

（大阪府市町村ボランティア連絡会広報部会）

市民活動の今

Close up! 住民参加型在宅福祉サービス

住民参加型在宅福祉サービスとは、利用者と提供者が会員制の仕組みをとって非営利・有償で提供されるサービスで、制度の谷間にある地域住民のニーズに柔軟に対応する住民相互の助け合いを基盤とした市民活動です。

このコーナーでは、市民活動が多様化する中で、従来から先駆的な取り組みを行ってきた「住民参加型在宅福祉サービス」取材することで、これからの市民活動のあり方を考えてみたいと思います。

利便性を第一にした福祉有償運送サービス

泉南市 NPO法人 泉南ドリーム

NPO法人泉南ドリームは、障がい者を対象にした居宅介護、重度訪問介護などのサービスのほか、泉南市で最も早く、福祉有償運送サービスを提供してきました。



▲理事長の祐代さんと同法人メンバー

ドライバーの数は、職員11名中7名で、全員がヘルパー取得者。車いすのまま乗り込める福

祉車両等を使用して、通院、通学などの日常的な外出や行楽、学習塾やショッピング、余暇活動などの趣味的な外出の手助けをしています。

運営の主眼は利用者の「利便性」。「利用者にとって必要であれば、でき



▲車いすのままなのでスムーズに乗車できます

るだけニーズに応じています。基本運賃は設定されていますが、例えば、奈良や和歌山など県外に出かけ、羽根を伸ばしたい場合など、1日まるまる貸し切りで1万円という具合に柔軟に対応しています」と理事長の祐代一さん。

また、利用者へのアンケート結果についても、過半数が「満足」という結果に甘んじず、「時間を長くして欲しい」「子どもの体格が大きくなったので男性のヘルパーさんありがたい」など一人ひとりの声を丁寧に受け止め、サービスの内容に反映させています。

泉南ドリームでは、現在、障がい児に特化した休日のデイサービス事業を検討中です。「学童で障がい児を受け入れられる所がまだまだ少ない状況もあり、働きながら障がい児を育てる親御さんたちは、仕事の疲れを休める時がありません。休みの日にデイサービスがあれば、少しでもゆっくりしていただけるのではないかと思います」。利用者のニーズをキャッチし、いち早く実現していく姿勢が、地域の信用を生んでいます。